

# 日本人青年はなぜ将来に希望を持ってないか？

## ——「外圧にあらがえない」体験仮説の生成

福岡大学人文学部  
坂本 憲治

### 要約

内閣府の国際比較調査によると、日本人青年は他国に比べて将来に明るい希望が持てない割合が高いことが指摘されている。本研究では、「将来に明るい希望が持てない青年」の背景や要因を探るために、大学生14名の意見を収集し、グラウンデッド・セオリー法を用いて分析した。その結果、「自信がない」「非力な自己」「損させられそうな社会」「将来やりたいことがわからない」という4カテゴリが生成された。本研究ではこれらを包括する中核概念に「外圧にあらがえない」という表現を付与し、現象の考察を試みた。今後は「外圧にあらがえない」体験を念頭に置いて青年個人への質的研究を行い、主観的体験の構造や要因間の相互作用を明らかにすることが課題である。

キーワード：青年期, 希望, 理由, 質的研究

### I 問題と目的

内閣府の国際比較調査「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(13～29歳)によると、「あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか」という質問項目に「希望がある」「どちらかといえば希望がある」と答えた割合は60.6%である(内閣府, 2018)。この割合は、日本以外の6か国(アメリカ92.5%, スウェーデン89.0%, イギリス88.4%, フランス84.2%, ドイツ81.7%, 韓国77.7%)と比べて最低である。このことは2013年の結果(内閣府, 2013)が公表された時点において広くメディアで報じられ(朝日新聞, 2014; 読売新聞, 2014; 内外教育編集部, 2014)、現代青年の希望をめぐる議論を活発にした。

青年の「将来の明るい希望」は、これまで少子化・高齢化や経済成長率といった社会的要因により論じられてきた。日本は人口統計上、2007年に超高齢社会(全人口に対する65歳以上の割合が21%超)に突入して以降、高齢化率は上昇し続け、2060年には約40%に達する見込みである(公益財団法人長寿科学振興財団, 2019; 内閣府, 2021)。高齢者1人を10人の現役世代(20～64歳の者)で支えていた1950年に比べると、近年(2015年)は高齢者1人を現役世代2.1人と約5分の1の人数で支えていることになる(厚生労働省, 2016)。

医療・福祉や社会保障費の逼迫を支える経済状況も盛況とはいえない。2005～2014年の経済成長率は平均0.6%と低く留まり(韓国3.7%, スウェー

デン1.8%, アメリカ1.6%, イギリス・ドイツ1.3%), 所得格差や相対的貧困率も他国に比べて高水準にある(鈴木, 2015)。社会学者の古市(2015)は著書「絶望の国の幸福な若者たち」のなかで「一億円の世代間格差」について、「現在の高齢者は自分が若い頃払っていた何倍もの社会保障給付を受け、一方で若者ほど損をするという事態が起こる」(316頁)、「二〇三〇年にはロスジェネと呼ばれる世代が六〇歳を迎え出す。(中略)消費欲旺盛な団塊の世代がいなくなり、老人化したロスジェネが増える社会を、果たして現役世代は支えることができるのだろうか」(331頁)と述べている。

現代青年を取り巻く社会・経済状況は、青年たちに大きな影響を与えていると考えられるが、当事者である日本の青年たちはこうした実態をどの程度問題として知覚しているのだろうか。日本財団(2019)の国際比較調査(17～19歳)によると、「自分の国の将来についてどう思っていますか」という質問項目に「良くなる」と回答した日本人青年は9.6%と9か国中最低である(中国96.2%, インド76.5%, ベトナム69.6%, インドネシア56.4%)。日本人青年の未来展望はネガティブな傾向にあるが、青年が社会的要因と自らの「将来の明るい希望」を関連づけているとは限らない。内閣府調査は「将来に明るい希望が持てない」理由を尋ねていない点で推測の域を出ないと考えられる。

また、「日本は他国に比べて希望がない」という調査結果は世間にわかりやすく、独り歩きしやすい

テーマであるが、単純な国際比較には注意を要する。文化心理学者の内田(2013)は、質問紙調査結果の比較においては文化的な反応バイアスや参照点の違いを考慮すべきであること、単純な量的比較よりも一文化内における体験の質的構造を検討する重要性を指摘している。「将来に明るい希望が持てない青年」を理解するには、心理学における「個」の視点を取り入れ、「社会」との関係のなかで相対的に議論していく必要がある。

青年の内的体験を明らかにするには、青年個人を対象としたインタビュー調査が効果的である。本研究では、日本人青年への質的研究を展開するにあたり、対話を方向づける指標を得るために、青年期当事者である大学生に「将来に明るい希望が持てない青年」の背景や要因を尋ね、仮説生成することで今後の研究に示唆を得る。

## II 方法

研究協力に同意が得られた教育学・臨床心理学を専攻する大学3・4年次生14名(男性7名・女性7名)を対象に、自由記述による質問紙調査を行った。調査時期は2021年3月であった。

質問紙調査は以下の手順に従った。研究者より研究協力者に対して、内閣府の調査研究結果をスライドを用いて説明したあと、「あなたは、『将来に明るい希望が持てない青年』の背景や要因をどのように考えますか。あなた自身の体験でも、あなたがこれまで見聞きしたことからも構いません。考えたこと、感じたことを自由に記述してください。」と教示した。記述データは約6300字、一人当たり450字程度の意見が得られた。得られた記述に個人が特定される情報が含まれる箇所はすべて記号化した。

データ分析はグラウンデッド・セオリー法(Corbin & Strauss, 2008/2012)を援用し、次の手順に従った。まず、プロトコルデータ全体を何度も読み、全体を把握した。次に、リサーチクエスションの視点から、意味のまとまりごとに切片化し、文章の意味を損なわない簡潔なラベルを付した。そして、記述に含まれるプロパティとディメンションを抽出し、それに着目して類似するラベルを集め、カテゴリを生成した。カテゴリ生成後は、プロパティとディメンションに着目してカテゴリ間の関係性を検討し、さらに抽象度の高い上位カテゴリを生成した。なお、本研究は探索的研究であることから、抽象化の程度は通常の質的研究よりも低めに設定し、無理に統合せず、ある程度具体性を残す水準に留めた。

本研究のデータ分析に際して、研究者は「将来に

明るい希望が持てない青年」の背景や要因について、主に将来の目標やキャリア選択における有能感が関与しているとの仮説を有していた。質的分析の過程では、この仮説に沿う予定調和的な分析に偏らないよう留意した。具体的には、研究者は質的分析に着手する前に仮説を書き出し、自らのバイアスを意識化し、分析過程でもその影響を内省し続けた。カテゴリ生成及びカテゴリ間の検討では、一定期間を置き、白紙の状態から再度ローデータとカテゴリを照合する機会を設けた。

## III 結果

「将来に明るい希望が持てない青年」の背景や要因について、大学生の意見を意味のまとまりごとに切片化したところ、36のラベルが得られた。これを最小単位として質的分析を実施したところ、以下8つのカテゴリが生成され、それらはさらに4つの上位カテゴリへと抽象化された(表1)。

抽象化の際、主に着目したプロパティは「時制」「対象」であった。「時制」プロパティは、切片化したデータに含まれる意味内容が「過去」「現在」「未来」というディメンションのどれに該当するかという視点であり、全ラベルに占める割合は、「過去」11.1%、「現在」52.8%、「未来」36.1%であった(表2)。「対象」プロパティは、希望が持てない背景・要因の対象が「自己」「社会」「自己・社会」というディメンションのどれに該当するかという視点であり、全ラベルに占める割合は、「自己」61.1%、「社会」19.4%、「自己・社会」19.4%であった(表3)。以下、4つの上位カテゴリを【 】, 8つの下位カテゴリを< >に括り論を進める。

【自信がない】はくネガティブで自信のない自己(10:ラベル数, 以下同)>, <序列を感じさせられた経験(4)>により構成された。主に現在の自己に対する認識であるが、過去の経験も含まれる形で自信のなさを示していた。【非力な自己】は、<非力さの知覚(5)>, <諦観(4)>, <過多情報への埋没(3)>により構成された。自己と社会・環境の関係性に関する現在の認識であるが、未来へのあきらめも含む体験であり、他のカテゴリに比べて「統制の困難性」というプロパティの高さを特徴とした。【損させられそうな社会】は、<割を食わされそうな社会制度(6)>, <横並びが求められる社会(1)>により構成され、主に社会の未来に対する認識を示すカテゴリであった。【将来やりたいことがわからない】は、下位カテゴリ<将来やりたいことがわからない(3)>のみで構成される力

表 1 生成したカテゴリーとプロトコル例

カテゴリー	下位カテゴリー	プロトコルの例	主なプロトタイプ	
			時制	対象
自信がない(14)	ネガティブで自信のない自己(10)	自分の将来について明るい希望は多少持っているものの、現実的なことを考えていくと不安で頭がいっぱいになります。自尊心も低いと思いますし、楽観的な考え方も苦手です。/ 受験の失敗やニート生活になったりするんじゃないかと物事を楽観的に見れない部分もあると思います。	現在	自己
	序列を感じさせられた経験(4)	スクールカーストというようなクラスの中での位置付けによって人望や影響力を測ったり、テストの順位によって学力の差を感じたりと、他者と自分を比較する環境が自分の能力に限界を感じさせ、希望を削いでしまうように感じる。	過去	自己
非力な自己(12)	非力さの知覚(5)	だから(他者を意識しすぎることから)こそ人生は自分でどうにかなるものではないと認識し、自分はそのなりに影響を与えることのできる存在ではないと自尊心も低くなってしまっているように感じる。	現在	自己
	諦観(4)	子どもの頃は、大人になったら好きな仕事をして、休日は趣味を楽しみ、何でも自分で決められるものだと希望を持っていた。しかし、今ではその選択の自由があるほどの能力や時間、お金を持ち得ないと諦めてしまっている。	未来	自己・社会
	過多情報への埋没(3)	SNSの影響も大きいのではないかと考えます。いろいろな情報はあふれかえる中で、自分に必要な情報を取捨選択することが難しく、集団として「希望が持てない」気分が蔓延しているようにも思えます。	現在	自己・社会
損させられそうな社会(7)	割を食わされそうな社会制度(6)	少子高齢化や年金問題、定年延長などネガティブな単語は出てきますがポジティブな単語はバツと出てきません。/ 少子高齢化社会となっている日本において、私が払った分のお金は年金として自分に返ってくるのか・払うだけ払って損をするのではないかと感じ、このことも将来に對して希望を持てなくなる要因になるのではと感じました。	未来	社会
	横並びが求められる社会(1)	校則の問題も重なるが、個性より無難や当たり前が求められることも影響すると考えた。高校、大学と進み、大手に就職することを目指すことが無難であり、そうすべきとされる仕組みも問題だと考えた。	現在	社会
将来やりたいことがわからない(3)	将来やりたいことがわからない(3)	私自身は、将来に対してどちらかと言えば希望がないに当てはまると思います。理由としては、将来やりたいことが未だ明確になっておらず模索している最中だからです。	未来	自己

表2 「時制」プロパティのカテゴリとその割合

	カテゴリ	ラベル数	割合
過去	序列を感じさせられた経験	4	11.1%
現在	ネガティブで自信のない自己 非力さの知覚 過多情報への埋没 横並びが求められる社会	19	52.8%
未来	割を食わされそうな社会制度 諦観 将来やりたいことがわからない	13	36.1%

カテゴリであった。このカテゴリは主に、自己の未来に対する認識を示した。

#### IV 考察

本研究では、青年個人へのインタビュー研究に先立ち、青年期当事者である大学生14名に「将来に明るい希望が持てない青年」の背景や要因を意見聴取し、仮説生成を試みた。その結果、「将来に明るい希望が持てない青年」の背景や要因に関わるカテゴリとして、【自信がない】、【非力な自己】、【損させられそうな社会】、【将来やりたいことがわからない】の4つを見出した。以下、生成したカテゴリをもとに「将来に明るい希望が持てない青年」の背景や要因について検討する。

##### 1. 「将来に明るい希望が持てない」青年の背景や要因

「将来に明るい希望が持てない」青年の体験として最もコード数の多かった上位カテゴリは【自信がない】であり、これに関連するカテゴリ【非力な自己】が続いた。これらは、主に現在の自分に対するネガティブな認識を示すカテゴリであった。大学生の意見では、〈序列を感じさせられた経験〉として、学校教育における成績や偏差値による序列づけ、暗黙の集団勢力としてスクールカーストの影響が挙げられた。この点は、今回の研究協力者は教育学・臨床心理学に関心を持つ大学生であったことも関与していると思われるが、【自信がない】【非力な自己】は、自己と他者とを比較した経験から「自分は劣っている」「他者よりも能力が低い」と知覚する体験を示している。

これに対して、【損させられそうな社会】は、〈割を食わされそうな社会制度〉を主体とするネガティブな環境への認識であった。年金問題や少子・高齢化などの社会問題を背景に、自分たちが上の世代を支えなければならないことに対する現在の認識

表3 「対象」プロパティのカテゴリとその割合

	カテゴリ	ラベル数	割合
自己	ネガティブで自信のない自己 非力さの知覚 序列を感じさせられた経験 将来やりたいことがわからない	22	61.1%
社会	割を食わされそうな社会制度 横並びが求められる社会	7	19.4%
自己・社会	諦観 過多情報への埋没	7	19.4%

を示しており、先行研究に類似したカテゴリである(古市, 2015; 鈴木, 2015; 日本財団, 2019)。なお、〈横並びが求められる社会〉は1つの記述しかなく今後研究を進める中で上位カテゴリに統合されることが見込まれる。ある大学生は「個性より無難や当たり前が求められる(中略)そうすべきとされる仕組みも問題」と記述した。この記述には、将来的に社会の仕組みによって自分らしさを犠牲にさせられるかもしれないという意味が込められているように思われる。

【将来やりたいことがわからない】は、将来の目標の有無にかかわるカテゴリであった。このカテゴリは、他カテゴリとの関係性を検討しても、自己に対するネガティブな認識の結果であるのか、社会環境に対するネガティブな認識の結果であるのか、あるいはその他の要因による影響かを推測することができず、抽象度の低い独立カテゴリとして扱うことになった。しかしながら、先行研究によると、将来の目標やそれに向かう道筋、達成しようとする意思の強さは将来の希望を構成する重要な構成要素であることから(渡辺, 2002; 都筑, 2007)、今後の調査においては別の形でカテゴリ化される可能性が高い。

以上の検討をふまえて「将来に明るい希望が持てない」と感じる青年の内的経験を推測すると、「自分は困難な社会環境に置かれたとき、逆境や困難に立ち向かうことができないかもしれない」「対処できないかもしれない」という統制困難な知覚が背景にあると考えられる。現代青年をとりまく社会環境は、「格差社会」(ユークャン新語・流行語大賞2006年受賞語)や「ブラック企業」(ユークャン新語・流行語大賞2013授賞語)、「親ガチャ」(ユークャン新語・流行語2021授賞語)といったキャッチーな言葉にあふれ、それにより意味づけられている。これらの言葉に示される世界観は、「困難を克服し、自身の力で開拓する」という能動的な世界観ではなく、「与えられたものにさらされ、受動的に生きる



図1 「将来に明るい希望が持てない青年」の体験仮説

しかない」という受動的な世界観である。さらに、デジタルネイティブ世代以降の青年であれば、SNSは主観的世界を構成する影響力の大きい要因となる。これらの用語にかかわる「炎上」や「拡散」は多大な影響力をもち、現代青年の受動的な世界観を強化・形成していると考えられる。

こうした点で、本研究では、上位カテゴリに通底する中核的体験として「外圧にあらがえない」という表現を付与したい(図1)。将来に明るい希望が持てない青年は、過去の経験から、もしくは現在の自分に自信がなく、非力だと感じている。それがゆえに【損させられそうな社会】を知覚したとき対処困難な予測を持ち、「外圧にあらがえない」という体験が喚起される。心理学者セリグマンは動物に統制困難な刺激を与え続けたとき、不快な状況から逃れようとする行動が生起しなくなることを「学習された無力感(learned helplessness: Seligman & Maier, 1967)」により説明した。これに倣えば、「将来に明るい希望が持てない青年」は、抵抗しても仕方がないという無力感を学習した、あるいは学習しつつある存在と理解できる。

「外圧にあらがえない」は、【自信がない】【非力な自己】という自己認識と社会環境の知覚との相互作用により生じていた。青年たちは、社会保障や雇用状況等について【損させられそうな社会】と知覚することでのみ、単純に希望を失っているわけではない。このことを踏まえれば、「将来に明るい希望を持つ青年」は、過去の経験をふまえて、あるいは現在の自分には多少の困難があっても克服できるという有能感を有している人物である。たとえ【損させられそうな社会】であったとしても、自分ならば何とか克服できようかと肯定的な予測が持てる人

物である場合、「外圧にあらがえない」と感じる程度は当然低くなる。

「外圧にあらがえない」体験に関連する調査結果として、日本人は「自分の人生を自分でコントロールすることができる」という認識(Inglehart et al., 2020)や「自分で国や社会を変えられる」という認識(日本財団, 2019)が他国に比べて顕著に乏しいという報告がある。文化心理学における自己観の研究によると、日本をはじめとする東アジア人は、自己を他者との人間関係に埋め込まれた存在としてとらえる「相互協調的自己観」が優勢であるのに対し、欧米文化は自己を他者から分離した独自の存在としてとらえる「相互独立的自己観」が優勢とされる(Markus & Kitayama, 1991)。

日本の大学生を対象に相互協調的自己観の実験研究を行った橋本(2011)は、日本青年の自己のとらえ方について、実証データをふまえて次のように考察している。「人々は実際には相互独立的な生き方を望んでいるにも関わらず、世間一般の人たちは相互独立的に行動しないだろうと予想するため、また相互独立的な行動をとるとまわりの人たちから嫌われてしまうだろうと予想するために、相互協調的な振舞いが人々に採用されているとの理解が妥当であるとすれば、相互協調的な振る舞いを日本人が採用しているのは、日本人の心の中に相互協調的な価値が共通して備わっているためではなく、自身の相互協調的な振る舞いが他者から好意的な評価を得るだろうと予測するためであると考えられる」(190頁)。

上記の橋本(2011)の指摘によると、日本人青年は、本来的には相互独立的に振る舞いたい欲求を持ちながらも、空想により肥大した「他者の目」を気にして自己を抑え、文化的に適切と思われる振る舞

いをしているといえる。こうした適応スタイルは、日本人青年に固有の息苦しさを生じさせ、社会環境の知覚との相互作用で「外圧にあらがえない」体験を強めている可能性がある。＜横並びが求められる社会＞はそのひとつの顕れではなからうか。今後の質的研究では、「外圧にあらがえない」体験の背景にある文化的影響も念頭に置く必要がある。

## 2. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、「将来に明るい希望が持てない青年」の背景・要因について仮説生成した。しかし、大学生に限定した調査であることから社会人青年を含んでおらず、また、教育学・臨床心理学を専攻する大学生のみを対象とした点で、自己の側面が強調された可能性がある。同じ大学生でも社会学・法学・政治学・経済学・商学などの視点から社会を見ている青年は、自己よりも社会への環境認識を強調するかもしれない。多様な学部・学科の大学生を対象にすることで新たなカテゴリが見出される可能性がある。今後は、社会人青年を含む日本人青年を対象に質的研究を行い、理論的飽和を目指すことが課題である。

特に、本研究において得られたカテゴリのうち【将来やりたいことがない】体験は記述数が少なく、十分に検討できなかった。今後は先行研究に照らしながらも、【将来やりたいことがない】体験の構造を明らかにする必要がある。例えば、【自信がない】【非力さの知覚】という自己観から派生したネガティブな体験であるのか、もしくは主に【損させられそうな社会】という環境認識から派生しているのか、あるいはそれ以外の要因や相互作用によって生じているのかというカテゴリの連関を検討することにより「外圧にあらがえない」体験をさらに精緻化できるだろう。

最後に、臨床実践における示唆を述べる。「外圧にあらがえない」という体験は、ナラティブ論の観点からいえば、それ自体が本人の「シナリオ」であり「ストーリー」といえる (Epston, White & Murray, 1992/1997)。本研究のカテゴリを用いて「将来に明るい希望が持てない青年」を表現するならば、【自信がない】【非力な自己】をドミナントストーリー (人生に支配的な役割をもつシナリオ) を生きる主人公が「外圧にあらがえない」という葛藤を今まさに演じている局面といえる。【損させられそうな社会】に疑念を抱き、もがくことで「外圧にあらがえない」主人公を演じている局面かもしれない。こうした青年たちが、自身のストーリーを再構成したり

オルタナティブストーリーを見出したりできるようになるためには、青年自身が見ている世界、感じている世界を内側から理解する現象学的視座が必要となる。青年期の心理支援においては、「外圧へのあらがえなさ」をいかに理解するか、その青年はどのような「もがき」によって自己を表現しているかについて臨床感覚を研ぎ澄まし、じっくりと耳を傾けなければならない。「将来に明るい希望が持てない青年」の主観的体験を解明することは、ナラティブ論的な青年期支援に寄与するものである。

## 付記

本研究は科学研究費助成金 (「将来に希望が持てない青年」へのキャリア支援：主観的世界観の諸相と変容プロセス, 課題番号: 21K13719) による補助を受けた。

## 文献

- 朝日新聞 (2014). 日本の若者, 自信も希望もない? 7カ国調査で最下位. 2014年6月4日, 東京朝刊, 4.
- Corbin, J. & Strauss, A. (2008). *Basics of qualitative research: techniques and procedures for developing grounded theory (Third edition)*, Sage Publication. 操華子, 森岡崇 (訳) (2012). 質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第3版). 医学書院.
- Epston, D., White, M., & Murray, K. (1992). A proposal for a re-authoring therapy: Rose's revisioning of her life and a commentary. In McNamee, S. & Gergan, K. J. (Eds). *Therapy as Social Construction*. Sage Publication. (野口裕二・野村直樹 (訳) (1997). 第5章 書き替え療法: 人生というストーリーの再著述. S・マクナミー, K・J・ガーゲン (編) ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践. 金剛出版, pp.139-182.)
- 古市憲寿 (2015). 絶望の国の幸福な若者たち. 講談社.
- 橋本博文 (2011). 相互協調性の自己維持メカニズム. 実験社会心理学研究, 50 (2), 182-193. DOI <https://doi.org/10.2130/jjesp.50.182>.
- Inglehart, R., Haerpfer, C., Moreno, A., Welzel, C., Kizilova, K., Diez-Medrano J., M. Lagos, P. Norris, E. Ponarin & B. Puranen et al. (eds. ). (2020). World Values Survey: All Rounds – Country-Pooled Datafile. Madrid, Spain & Vienna, Austria : JD Systems Institute & WWSA Secretariat [Version: <http://www>.

- worldvaluessurvey.org/WVSDocumentationWVL.jsp].  
公益財団法人長寿科学振興財団 (2019). 日本の超高齢社会の特徴. (最終閲覧日 2021 年 12 月 1 日)  
<https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/tyojyu-shakai/nihon.html> (2021 年 12 月 1 日取得)
- 厚生労働省 (2016). 平成 28 年版厚生労働白書.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**(2), 224-253.  
<https://doi.org/10.1037/0033-295X.98.2.224>
- 内閣府 (2013). 平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査.
- 内閣府 (2018). 平成 30 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査.
- 内閣府 (2021). 令和 3 年版高齢社会白書.
- 内外教育編集部 (2014). 日本の若者, 将来に希望持てず: 内閣府の 14 年版「子ども・若者白書」.  
内外教育, **6348**, 6-7.
- 日本財団 (2019). 第 20 回 18 歳意識調査「テーマ: 社会や国に対する意識調査」調査報告書.
- 鈴木賢志 (2015). 日本の若者はなぜ希望を持ってないのか: 日本と主要 6 カ国の国際比較. 草思社.
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. (1967). Failure to Escape Traumatic Shock. *Journal of Experimental Psychology*, **74**, 1-9. <http://dx.doi.org/10.1037/h0024514>.
- 都筑 学 (2007). 大学生の進路選択と時間的展望—横断的調査にもとづく検討—. ナカニシヤ出版.
- 内田由紀子 (2013). 日本人の幸福感と幸福度指標. 心理学ワールド, **60**, 5-8.
- 渡辺弘純 (2002). 希望の心理学へ向けて: 研究覚書. 愛媛大学教育学部紀要, 教育科学 **48**(2), 27-42.
- 読売新聞 (2014). 若者「将来に希望」 6 割止まり 7 か国で最低. 2014 年 6 月 3 日, 東京夕刊, 夕三面, **3**.

---

## ABSTRACT

Why Can Young Japanese People Not Envision Bright Futures?

Generation of a New Hypothesis: Experiences of “Failure to Resist Against External Pressure”

Kenji SAKAMOTO (*Fukuoka University*)

An international comparative survey by Japan’s Cabinet Office indicates that Japan has a higher ratio of young people who cannot envision bright futures for themselves than other countries. In this study, I collected opinions from 14 university students to investigate the backgrounds of and factors that influence “young people who cannot envision a bright future” and analyzed their opinions using the grounded theory approach. I grouped the results into four categories: “a lack of confidence,” “a powerless self,” “a society that is likely to impose disadvantages on individuals,” and “a lack of vision of what to do in the future.” In this study, I examined this phenomenon, using the phrase “failure to resist against external pressure” to represent the core notion of the four categories. The next step is to conduct qualitative studies of young individuals and their experiences of “failure to resist against external pressure” and elucidate the structure of their subjective experiences and the interactions among the factors.

Key words: adolescent, hope, reason, qualitative study

*Fukuoka University Journal of Clinical Psychology*, Volume 20, 2021, 27-33.

---